

コメント1

宇野 邦一

立教大学現代心理学部名誉教授

はじめにみなさんに『O Pagador de Promessas』という1962年のブラジルの映画の一部をご覧ください。『O Pagador』は、罪を償うもの、約束を果たすものということです。これは約束を果たし、キリストのように罪を贖う男の話で、すごくいい映画です。1962年に、カンヌ映画祭でパルム・ドールを獲得しました。

映画『O Pagador de Promessas』にみる カンドンブレとカポエイラ

資料3-1に示した映画の一場面では、主人公の男が大きな十字架を背負っています。サルヴァドールのバイアの教会に、この十字架を運んできたのです。

主人公の男は、アフリカ由来の黒人たちの宗教、呪術的な面がある宗教の儀式にすぎなくて、自分がとても大事にしているロバが死にそうになっているのを助けてもらおうと神様にお願いして、実際にロバは助かりました。そのとき「ロバが助かった暁には、等身大の十字架を持ってサルヴァドールの教会に徒歩でお参りする」と誓ったので、この教会まで十字架を背負って歩いて運んできたわけです。

ところが、その事情を聞いた資料3-1の左側にいる教会の司祭は、まるでなにか恐ろしい言葉を聞いたかのように、「カンドンブレ！」と言って、「十字架をかついで歩くのは冒涇だ。教会に入れてやるわけにはいかない」といって、願いを聞き入れてくれません。

そのあと、祭りに集まってきた人々のあいだで「この人はもしかして現代の聖人じゃないか」とか「いや、ただの詐欺師じゃないか」など噂が噂をよびます。ついにはジャーナリストなどが詰めかけて、大騒ぎになります。そこでのお祭りのなかでカポエイラが行なわれています(資料3-2)。

この映画には字幕が付いていませんが、YouTubeで見ることができます。私はサンパウロで、ブラジルの映画になにか面白いのではないだろうか、まちの屋台みたいなどころでまったく無作為に買ったも



資料3-1 映画『O Pagador de Promessas』の一場面
<https://www.youtube.com/watch?v=WLqFa-61tkM>



資料3-2 映画『O Pagador de Promessas』での
カポエイラ

<https://www.youtube.com/watch?v=WLqFa-61tkM>

のを次々見ていて、この映画に出会いました。私はポルトガル語ができませんが、字幕がなくても最後まで見入ってしまいました。それぐらい映像に力があります。

メルロ＝ポンティ以降の身体論と ジル・ドゥルーズのマイノリティ哲学に着目

本日、私がここにいるのは奇妙なことだと思われる方が多いと思います。私はフランス文学や思想を専攻していてブラジルについては疎いのですが、2006年

ごろから何度もブラジルに行って、セミナーやレクチャーをしました。

そこでの講演が契機となって、ブラジルで、ポルトガル語と英語のバイリンガルの本を出版しました。『知られざる身体の発生』というタイトルです。今日はまさに身体の問題になりましたが、私の長い間のテーマが身体です。先ほども名前が出たメルロ＝ポンティ以降の身体論に、興味を持ってきました。

私はブラジル研究者ではありませんので、ブラジルでは三つぐらいのテーマで話します。一つはジル・ドゥルーズの身体哲学の話です。なぜジル・ドゥルーズの話がブラジルで熱心に聞いてもらえるのかについて、私はずっと意識してきました。

ジル・ドゥルーズの哲学の大きなテーマがマイノリティで、彼の哲学は「マイノリティの哲学」と言えます。マイノリティ・グループは、それぞれの国に存在します。その際のマイノリティというのは、人口の数に由来するものではありません。たとえばブラジルでカポエイラをする人は、数としてはマイノリティとは言えませんが、これだけカポエイラについて話題になるのは、それがマイノリティ・グループのものだからです。

しかし、マイノリティの哲学では、マイノリティ集団とか社会的・歴史的な意味を持つマイノリティの域をはるかに越えてゆきます。たとえばヨーロッパの精神と身体をまっ二つに分けて考える思想の伝統では、身体そのものがマイノリティになります。また、女性や子どもがマイノリティです。さらに世界ではヨーロッパ系の白人が、そして大人がマジョリティだったりするわけです。

マイノリティという考え方では、まさに身体がマイノリティになる。普段我々が知覚している、感じている、思考している大部分のカテゴリから身体の次元が逃れてしまうことです。そういう目に見えない世界、知覚しがたい世界がマイノリティである。このマイノリティの次元をジル・ドゥルーズ＝フェリックス・ガタリはどんどん拡げていったため、今日とても重要な、世界的な案件になっているマイノリティの問題を本質的に考える機会を作ったと言えると思います。

演劇に身体を発見した アントナー・アルトの思想遍歴

もう一つの私の研究テーマは、アントナー・アルトというフランスの演劇人です。この人は、演劇のなか

に身体というものを発見する。「身体の演劇」という表現は、今日ではほとんど古くさいものになりましたが、1920年代、30年代にこんなことを言った人はほとんどいませんでした。そんななかで彼は、「演劇というのは身体表現だ」、「身体を発見する芸術だ」ということを言い続けた人です。

そして、ヨーロッパ・モデルの演劇ではなく、インドネシアのバリ島やメキシコのタラウマラ・インディアンに興味を持って、実際にメキシコにも行きました。ブラジルには残念ながら行っていませんが、彼なりに演劇と身体という問題を、とても大きな本質的なスケールで考えて、バリ島、さらにはメキシコと、画期的な思想的移動を行なった人として知られています。

身体について真剣に考えた ダンスの改革者・土方巽の足跡

もう一つ私がブラジルで話をするテーマは、土方巽という、私が彼の晩年に知り合った偉大なダンサーについてのことです。彼は1960年ぐらいに日本のダンスの概念をまったく変えてしまった、たいへんなダンスの改革者です。

それと同時に、彼はダンサーにしてはずいぶんたくさん文章を書きました。『土方巽全集』という著作集が、2冊出版されています。そのなかで彼は、言葉の問題、身体の問題、表現の問題、それからこの社会のなかでダンスがなぜ必要なのかということ、とても本質的なレベルから考えています。

今日、「舞踏」という言葉は世界中で使われています。舞踏とカポエイラにどんな関係があるか、考えてみると興味深いかも知れません。そして、そもそも舞踏とはなにかを考える必要がある。「舞踏」という言葉はあまりに安易なキャッチ・フレーズになってしまったので、修正しなくてはいけないのではないかなど、ダンサーのあいだでも議論が巻き起こっています。

そうしたことに関連して、土方巽という人が、日本の1960年代という文脈で身体について真剣に考えた足跡を、ブラジルではお話ししてきました。

ブラジルのルーツを探る グラウベル・ローシャの作品世界

このようなことを考えながら、私が徐々に発見してきたものの一つがブラジルの映画です。グラウベル・ローシャは日本でもDVDのボックス・セットが出ているので、見ることができます。1960年代から1980年代ぐらいまで、フランスのヌーベルバーグにあたるよ



うなブラジルの「シネマ・ノーヴォ」という流れを作った張本人と言える映画監督です。

グラウベル・ローシャの初期の映画に『Barravento』という1962年の作品があります。先ほど紹介した『O Pagador de Promessas』も1962年の作品でした。このころは、もう少ししたらブラジルがファシズム体制に入る時期です。全体主義支配に向かう、軍政に入っていく時期ですが、その前にこういう映画ができています。これらはすでに激しい抵抗の意識が表現されている映画でもあるわけです。

グラウベル・ローシャの『Barravento』も、やはり舞台はバイアアで、カンドンプレの文化が背景にあります。そこで暮らす漁師たちは、カンドンプレの予言で毎日生きている。そこに黒人の若い男性が都会から帰ってきて、「こんな生活をしていたら、おまえたちは絶対に貧困から抜け出せないぞ」と言い始める。「どうにかこういう生活を変えなきゃだめだ」という葛藤をテーマにした、すばらしい映画です。

自分のことを白人だと認識しているブラジル人でも、祖先に黒人がいるケースはとて多いようです。しかし、ローシャはおそらくヨーロッパ系だと思います。ローシャは40歳ぐらいで亡くなりますが、1962年、23歳という若さで、バイアアの黒人たちの生活に密着して、しかもドラマチックな作品を作りました。

彼の映画を見たことがある方もおられると思いますが、イタリアのパズリーニやゴダールの影響を受けていて、当時としては斬新な表現意識を持ちながら、バイアアのアフリカ系の人たちの生活に密着して、いわばブラジルのルーツを探る映画を作っている。このようなところからも、ローシャは評価されていきました。

他にも彼は、ブラジルのある時代の義賊の映画も撮っています。ブラジルの貧民層から現れた義賊と、その義賊を討伐するために遣わされた刺客の映画で、ウエスタン仕立てと言えばそうですが、映画の作り自体はアメリカの西部劇とはまったく違う技法で作られたすばらしい映画があります。

このように私のブラジルへの興味は広がってきました。今回はカポエイラのお話をたくさんおうかがいできて、とてもうれしく思っています。

ドゥルーズ＝ガタリの生成変化の重要性と マイノリティを万人の問題とした土方巽

ドゥルーズ＝ガタリのマイノリティの哲学の重要な点は、けっしてアイデンティティの擁護ではないと

いうことです。たとえば「黒人の文化は白人よりもはるかにすぐれている」とか、そういう話ではありません。ドゥルーズ＝ガタリのマイノリティというのは、「マイノリティになること」がとて重要なのです。フランス語で『Devenir』、「生成変化」というややこしい言葉を使う場合もありますが、マイノリティに「なる」ということが大事です。

つまり、その場合は、白人や日本人が黒人になってみようとか、アントナー・アルトーがメキシコのインディアンになってみようとか、バリ島のダンサーになってみようとか、そういうことが目覚ましいのだと言うわけです。ですから、女性も女性であるだけではなくて、女性への生成変化を遂げないとマイノリティ哲学の意味はないと言っています。

土方巽の最後の仕事は『病める舞姫』という本です。これは全編、自分が子どもであった、その子どもの身体を追求するというを10年ぐらいかけてていねいにしているものです。晩年、土方巽は踊りませんでした。踊らずに、子どもになるということを一所懸命にしていました。ですから、彼のマイノリティ哲学というのは、「舞踏」を通じて、とてダイナミックに、しかも万人の問題、みんなの問題としてマイノリティという問題を立てた。これがとてもおもしろいことだと思います。

